

BILLIE JEAN *past, present & future*

ビリー・ジーン・キングの好物はテニスとアイスクリーム、それに映画である。評判の映画「E.T」について、彼女はこんなことをいっている。「あの映画は私もすごく気に入ったわ。でも、少年たちが自転車で大空へ舞い上がるときも、女の子は1人として飛べないの。私は映画館の席に座りながら、『私も自転車で空を飛びたい』と思っている全ての女の子たちのことを考え続けていたわ」

スーザン・K・リード

女性とは何かを教えてくれたコーチ

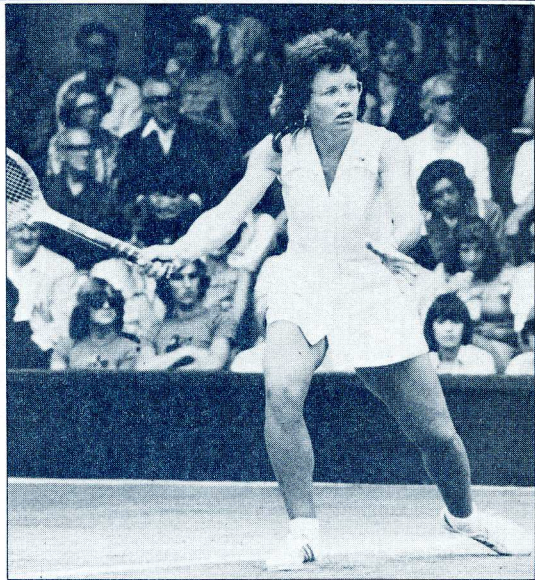
もし、大空を飛べる女の子が出現したら、それはビリー・ジーンに違いない。彼女のこれまでの人生には大きな波乱が何回かあったが、女性の歴史を塗り変えてきたことは確かだ。彼女が最初に大きな影響を受けたのは、16歳のときにテニスの指導を受けたアリス・マーブルである。「彼女は、テニスに勝つことだけでなく、女性とは何かという考え方を教えてくれた」という。

いま私は、ビリー・ジーンのマネージメントをしているマジソン・アベニューのあるPR会社のオフィスにいる。この会社がかかえているのは芸能人がほとんどで、彼女は唯一のスポーツ選手である。他のトッププレーヤーと同様、彼女もドナルド・デルやIMGといった有力ブローカーと契約しているが、さらに、このPR会社にも窓口を持っていることが、一般のスポーツ選手にはないビリー・ジーンの才能を、そのまま物語っていると見えるだろう。

彼女が部屋にはいってくると、途端にあたりの雰囲気気が活気づいた。同じように、彼女がコートに出ると、観客の目は一斉に彼女に集中する。つまり、ビリー・ジーンこそ、テニスを現在のような大衆向けのエンターテイメント(娯楽)に仕立てた功労者なのである。

ソファに腰かけ、ヒザの上に置いたコーヒーカップをスプーンでまぜている目の前の彼女は、とても39歳とは見えない若々しさだ。とくに、メガネの奥に光るブルーの瞳がいたずらっぽく輝くのが印象的である。

ビリー・ジーンの前秘書だったマリリン・バーネットが、7年間の恋愛関係を世間に暴露し、財産分与の訴訟をおこしたのは、1980年春のことである。このあと、彼女は記者会見でレズビアンであったことを認め



全米オープンの出場をとりやめた。このスキャンダルが与えた精神的ダメージは大きく、一時は全くラケットを握る気もおこらなかったという。裁判はこの年の暮れに彼女の勝利に終わったが、かつての自信を取り戻すには、さらに時間がかかった。

そして今、やっと暗雲をはらいのけたような表情で、「また、私はクレージー・ウーマンに戻って、楽しくやれるようになったわ」と明るくいうのである。

反体制、反男性、反フェミニスト

ビリー・ジーンがこれまでたどってきた道は、テニスに於ける輝かしい業績という理由だけでなく、変動する社会、特に女性運動の流れに驚くほど似ているという点で、注目に値する。彼女はいろいろな意味で、時代の先駆者といえる。

話を1950年代初期に戻そう。彼女はカリフォルニア州ロングビーチの典型的な中産階級の家で生まれた。父は消防士、母は主婦であった。当時、少女だったお転婆のビリー・ジーン・モフィットは、兄のランディー(のちにサンフランシスコ・ジャイアンツのピッチャーとなる)に負けられないような人間になろうと決心していた。しかし、実際にはテニスと野球は違っていた。

テニスの世界は閉鎖的で、うるさいルールがいろいろあった。そんな壁に、彼女は何度もぶつかっている。白いスコート(テニスのスカート)を持っていないので、ショーツをはいて大会に出ようとしたら拒否されたこともあるし、旅費が工面できずにせっかくのトーナメント出場のコートをファイにしたこともある。17歳で、女子シングルス・ランキング4位になった彼女は、ロサンゼルス大学に進んだ。1961年のことである。

当時はまだ、キャリア・ウーマンは例外的な存在で、ましてスポーツの世界で成功した女性は皆無だった。

大学で法学部の学生だったラリー・キングに出会い、彼女は結婚した。その後、ラリーの勧めでテニスに打ち込むようになった彼女は、1966年、ついにランキングNo.1の座と、ウィンブルドンの栄冠を手にする。23歳だった。これは、ウィンブルドンで19、他の3大トーナメントで12のタイトルを取るというキング時代の夜明けであった。

この時からビリー・ジーンの名は女子テニスそのものを意味するようになったほど、彼女の果たした役割は大きい。彼女は階級間の壁を取り除いたばかりでなく、1971年にはアマチュアリズムの欺まん性を糾弾し、仲間8人を率いて初の女子プロツアー、バージニア・スリムス・サーキットを設立した。これは、新しい女性の生き方として、身を持って経済的な自立を実践したものだ。そして、この年、女性スポーツ選手として初めて、10万ドルプレーヤーになったのである。さらに2年後、賞金10万ドルをかけた“男女の対決”で、元デ杯選手のボビー・リッグスを破り、“女性はいか弱き性”という社会通念をもうちくだいた。これは、アメリカ文化の歴史にも残る特筆すべき業績といってもいいだろう。

世間を驚かせたニュースの中には、1971年にワシントンポスト紙にスッパ抜かれた中絶問題もある。中絶に関して公けの場で語られ始めたばかりだったが、彼女はその事実を堂々と認めたのである。こうした言動が、多くの人たちに影響を与えていることを、彼女はよく知っている。嫌う人もいれば、好いてくれる人たちもいるのだ。彼女は、様々なものに対して本能的にリアクションをおこすので、あるときは反体制、またあるときにアンチ男性、そして反フェミニストというレッテルまで張られてしまう。

男性は女性より公私を区別するのが上手

ビリー・ジーンは、現在もリーダーというイメージがあるが、女子テニスの代弁者という役割に対して意欲を失い、WTA（女子テニス協会）の会長をやめている。「仲間の言い分を聞く時期は、もう終わったわ。私の熱意は9年がかりでWTAを作ったときにもう燃えつきってしまったのよ。将来については、みんなの自由だわ」彼女はこういう。

ナブラチロワが会長の座についたことに対しても、批判的である。女子選手の年齢が低下していることで、未熟で自己中心的な選手が増えたことも、不満の一つのようだ。

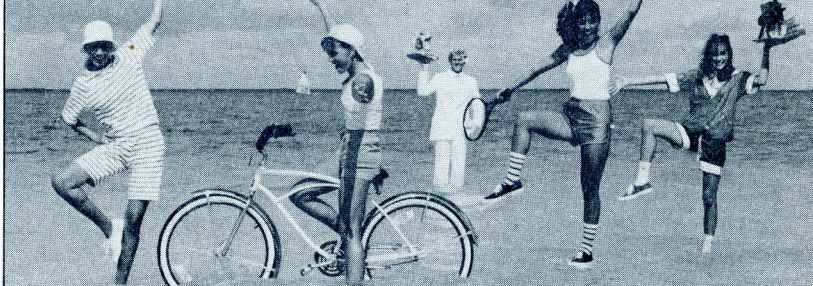
「私がこれから一生懸命やりたいのはWTT（ワールド・チーム・テニス）の仕事よ」と、彼女は目を輝かせる。チームテニスは6人で1チームを作り、8チームが団体で争う方式でシングルスよりダブルスの試合に比重がかかる。この方式だと、ある日はリーダーで次の日は裏方に回ったりする。「チームスポーツは、それぞれお互いが気に入らなくても、目的を成し遂げるためには、一丸となってプレーします。この点、男性の方が女性より友情とビジネスをはっきり区別して考えていますね。いま私が必要としているのは、一つの仕事を遂行するために一緒に働く方法を知っている、働く女性なんです」

彼女自身、チームスポーツで成功したのではない。彼女が強調している柔軟な態度や協調性は、チームスポーツを通して培われるものだが、皮肉なことに彼女は自分に最も適した個人スポーツで今日の成功を勝ち取ったのである。

いま、彼女のかたわらには“頼もしい自転車”が置いてある。少し古くなったが、十分に整備され、発車の合図を待たばかりなのである。（訳＝山口昌子）

（WOMEN'S SPORTS 1982年11月号より抄訳）

スポーツは、まず カロリーでございませう。



DESCENTE

女性のマルチスポーツウェア、レディスポ。

LADYSPO